

沼沢系林崎流の成立と展開

The Formation and Development of Numazawa-style Hayashizaki-ryu Iai

田中大輔

TANAKA, Daisuke

【キーワード】居合術、武芸伝書、卍、朱子学、転封

Key words: I The art of drawing swords, Martial Arts Books, Swastika, Neo-

Confucianism, Dainyo's fiefdom change

はじめに

本稿は、近世に登場した居合術の一派である林崎流、分けても沼沢長政が工夫し相伝した系統について、その成立と展開を論じるものである。

居合術の歴史学的な研究を試みた和田氏は、居合の成立が「野外における実戦的な抜刀から、屋内などでの急な変に応ずる為の治世における武術へと変革」したことを意味し、ひいては中世から近世へと時代の画期を特徴づけるものであったと展望している¹。和田氏は各居合流派の伝書の記載内容を比較し、居合術の術義の特質は、日常の変化に応じることであると指摘した²。また、戦闘状態を抜刀前の「未発」と、抜刀後の「已発」とで区分し、座居で行う居合に前者、立合で行う剣術に後者の性格がそれぞれ強く、戦闘の展開

や経過により相互に補完的關係にあると捉えた³。

和田氏の論考は端的に居合の特徴を捉えてはいるが、危急の戦闘に対応すること自体は、治世、乱世という社会情勢を問わず接敵状況において生じ得よう。また、居合における用具と技法の關係についても、近年解明されてきている、一七世紀半ばの刀の特徴や風俗について想定されていない。

尾脇秀和氏は、一七世紀半ばの刀の特徴として、反りが浅く長大な規格の流行を指摘した。例えば『雑兵物語』は、「足の踵をた、く」ほど長く、「まつすぐな棒の様な刀」と表現した。このような刀の登場は、戦国期から争いの少ない江戸期へと移行するという時代観に結び付けられ、実用性のない見た目重視の刀装とみなしている⁴。

しかし、『人倫訓蒙図彙』における武術「いあいとりて」の項には、

室内で反りのない長大な刀を使いこなす様が描かれている。また、本稿で取り上げる林崎流・田宮流などの居合の諸派は、長大な刀を用いることで知られる。ほかに、反りの深浅について庄内藩士の小寺信正は、「すぐなる刀」と「まがれる刀」とを比べ、反りの浅い刀は抜きにくい、深い刀より早く敵に刀が到達するため、居合をする者は好むと主張する⁵。江戸前期における居合・捕手の流行は、『好色一代男』や『浮世草子』にも描かれ、武家奉公に有用な技能として広く認知されていたことが窺われる。

居合が刀の長大化や反りを浅くする流行にも対応して、新たな戦闘方法を提供し、多くの人々が共有していたといえよう。当該期の刀の形状変化は、新たな戦闘技法の創出と普及に寄与したが、必ずしも実戦性の喪失を意味しないのではあるまいか。

武器の特性や操法技術から時代の特質、画期を導き出そうとする際に、どのような人々が武器とその技術を開発し、相伝し伝播していったのか、地域や時期の偏差、携わった人物の言説を踏まえてその動向と影響を検討し、再構築する必要がある。

そのような観点から居合術を歴史的に研究するにあたり、創始者の一人とされる林崎甚助重信とその流儀形成の過程を明らかにすることは重要であるが、彼に関する一次史料は未発見である。そのため、彼の高弟とされる田宮平兵衛（別称・対馬守、業正など）やその弟子・長野無楽斎権露らの事歴を実証的に究明することが、その準備作業となる。

近年、田宮対馬守ら田宮家が伝えた紀州田宮流については森林健一氏がその活動や流儀の形成、継承の過程などを巨細に研究してい

る⁶。長野無楽斎についても、同族と目される箕輪長野氏中の人物比定と、無楽斎系の初期の型の考察を試みた⁷。同氏は林崎重信の高弟について後の相伝者が記した記録等から、高弟らの行動や流儀の変容等を推測する手法をとっており、做うべきものといえよう。他方、無楽斎の弟子の一宮照信や白井成近の系統に属する伝書はテキスト研究が進み、流儀の背景にある思想や、技法の基本的構造に関して知られるようになった⁸。

しかし、長野無楽斎をはじめ田宮平兵衛や林崎重信が創始し形成した術技を、その後の門流がどの程度継承しているのか、他の系統の技や理論に関する資料を集め、比較検討する必要がある。かかる状況をふまえ、本稿では研究の立ち遅れている、長野無楽斎の弟子・沼沢長政が工夫し相伝した門流の技術や思想、伝播の過程を分析する。沼沢長政の系統は林崎（新）夢想流、無楽流、神流などと称されるが、本稿では便宜上一括して「沼沢系林崎流」と呼ぶ。

沼沢系林崎流については『林崎明神と林崎甚助重信』⁹によって相伝者の概略や関連する東北地方の史料が示された。ほかに間島功氏や野本禎氏が、会津藩を中心に史料および伝承者と相伝関係を紹介している¹⁰。両氏とも、会津藩松平家の基本史料である『家世実紀』や、同藩の武者者を紀伝体で記述した『会津日新館志』の記載などに拠る。これら先行研究により伝播した地域や人的関係の一端が判明しているものの、流派の術義や思想については未だ十分に検討されていない。

そこで本稿では、かかる課題に取り組むため、対象範囲として以下の二点を設定する。第一に主な対象地域は、この系統が伝播した

秋田藩、出羽国村山郡、会津藩、陸奥国信夫郡、二本松藩、三春藩、仙台藩、讃岐高松藩とする。第二に対象年代は、沼沢氏が会津蘆名氏に属していた一五八〇年代から、一八世紀前期に各藩の家臣団・住民に流儀が定着するまでの約一五〇年間とする。テキストの内容を比較する際は、それ以後に作成した伝書も用いる。

次に研究方法としては、まず沼沢系林崎流に関する一次史料を可能な限り収集し提示したうえで、相伝者の家系図や各藩における伝承等の二次資料を援用しつつ、その相伝関係や術義の内容について比較、同定作業を行う。第一章においては相伝者の系譜を、第二章においては術技と思想について取り扱う。この作業により、相伝者のより広範な動態を把握するとともに、術技の体系や構成、解釈の背景となった思想の要点を明らかにしたい。

第一章 相伝者の系譜

第二節 沼沢家と沼沢長政

本章では沼沢系林崎流の継承者について、流儀成立の初期の人物、特に沼沢長政と菅澤忠道に焦点を当て、相伝関係を概観してみたい。さらに、これまで注目されていなかった讃岐高松藩における沼沢系林崎流の相伝を上げたい。

これから沼沢系の系譜を論じるために、まずその伝系を図1に整理した。沼沢系の特徴としては、長野無楽斎の他の弟子である一宮照信や白井成近の系統（以下それぞれ一宮系、白井系と呼ぶ）では、林崎重信と長野無楽斎との間に田宮平兵衛を記載するのに対し、沼沢系では記載せず、長野の苗字も「永野」と記していることが挙げ

られる。

次に、沼沢系林崎流を成立させた沼沢氏および菅澤氏の来歴と動向を跡付ける。最初に、沼沢甚五左衛門長政について、沼沢家が仕えた大名家ごとに考察する。長政は、奥会津に割拠した山内氏の一族・沼沢出雲守実通の次男で、長野無楽斎の弟子とされる。明暦元（一六五五）年に七九歳で没し¹¹、行年で逆算すれば天正四（一五七六）年に出生したことになる。沼沢氏は沼沢湖一帯を本拠とし、戦国期には会津を領した蘆名氏の傘下にあった¹²。

天正一七（一五八九）年、摺上原の戦いで蘆名義広が伊達政宗に敗れると、義広は実家の常陸佐竹家へ敗走し、沼沢実通も共に落ち延びた。実通と長子・重通は京都へ上り、豊臣政権へ蘆名家の旧領回復を嘆願したが認められず、義広は常陸江戸崎城主に留まった。奥州仕置の後、実通は沼沢旧領へ一時帰還したらしく、会津に入部した蒲生氏郷から出仕を勧誘されたが辞退した¹³。

その後、実通は文禄二（一五九三）年に文禄の役のため名護屋城に参陣した。重通は摺上原敗戦後、忠通が常陸国に一〇余年在住したとする¹⁴。摺上原の戦いの折には、長政はまだ一四歳であり、長政も忠通とともに常陸に移住したと推測される。長政が居合の稽古に専念できたのは、沼沢家の常陸移住後とするのが妥当であろう。

慶長七（一六〇二）年、佐竹・岩城両氏が秋田へ転封すると、鳥居忠政が磐城平に入部した。沼沢実通は長子の重通とともに蘆名氏から離れ鳥居氏に出仕し、元和八（一六二二）年の山形転封にも従った。鳥居氏分限帳（表1）にみえる「沼沢出雲」は重通、「沼沢甚左衛門」は長政とみなせる。

林崎甚助重信〈居所不明〉

└永野（長野）無楽斎権露〈居所不明、のち彦根藩カ〉

└沼沢甚五左衛門（甚〈右、左〉衛門）長政〈磐城平・山形・会津藩〉

└神田七兵衛尉勝重〈山形・会津藩〉…

└└大木左大夫定頼〈仙台藩一関〉…

└芦澤弥兵衛忠道 / 治郎（治、次）右衛門忠通〈山形・会津・讃岐高松藩〉

└吉田藤右衛門長孝〈讃岐高松藩〉…

└新美吉之丞貞重〈会津藩〉…

└芦澤喜兵衛直（真）治〈讃岐高松・会津藩〉…

└└畑権十郎〈会津藩〉

└└└…秋田市郎右衛門尉光昌〈三春藩〉

└└└└三浦藤兵衛尉一入道義門〈二本松藩 [註2]〉…

└須藤平右衛門茂道〈秋田藩〉…

└吉成文左衛門助勝〈秋田藩〉…

└└…〈5代略〉…山口嘉左（右）衛門義里〈仙台藩 [註3]〉

└└└…五十嵐与五右衛門〈村山郡林崎村 [註4]〉

註1：本稿で引用した諸史料に記載された伝系を棒線で連結した。掲示する者は、各地ではじめて相伝した者等に限る。名前の末尾に山括弧で所属した藩名や居住地を付した。相伝者を省略した個所は点線部で表す。

註2：「林崎神流居合」（『林崎明神と林崎甚助重信』91-94頁）。『二本松市史 第9巻 各論編 2 自然・文化・人物』（二本松市、1989年）348・349頁。

註3：「御家中士凡諸芸道伝来調書抜」（『宮城県史 第18 医薬・体育』（宮城県、1959年）391・417頁）。寛政4年5月時点の林崎夢想流師範として、仙台藩の大藩士・山口嘉右衛門を登載。山口以前の仙台藩への流入経路は不明。

註4：「林崎夢想流居合」（『林崎明神と林崎甚助重信』77-78頁）。仙台系の内容。

図1 沼沢系林崎流略伝系

表1 「鳥居氏分限帳」林崎流関係者抜粋

所 属	知行石高	名 前	備 考
鉄砲組	1000	沼沢出雲	鉄砲組8組のうちの1組
鳥居左近組	200	芦沢弥次右衛門	芦沢次郎右衛門兄カ
鳥居左近組	150	芦沢次郎右衛門	芦澤弥兵衛忠道カ
鳥居伊右衛門組	200	沼沢甚左衛門	沼沢甚五左衛門長政カ
松本勘右衛門組	75	神田覚兵衛	神田勝重の父・角兵衛カ

註：『山形市史資料』第51号（山形市、1978年）所収。山形市長源寺所蔵。寛永2年に戸沢定盛に付いて新庄藩戸沢家に派遣された家臣がない（『出羽国最上郡新莊古老覚書』、臨川書店、1998年復刻、100-101頁）。表中の芦沢弥次右衛門が図2「芦澤三平系譜」の治郎左衛門某ならば、彼が死亡した寛永12年3月以前の作と推定される。

寛永一三（一六三六）年には、鳥居氏に代わり保科正之が山形城主となった。正之は沼沢重通を鉄砲組の組頭に任じ厚遇した。弟の長政は村山郡中で代官を務め¹⁵、主に管轄地と山形城近辺にいたと考えられる。なおこの時期に、神田良勝（のち勝重）が屋敷を接した縁で長政の弟子となったという¹⁶。

会津転封後、兄の重通は猪苗代城代となった。寛永二〇（一六四四）年の「保科氏分限帳」¹⁷には、知行二二〇〇石の「沼沢出雲」と知行二五〇石の「沼沢甚五左衛門」がいる。これも『家世実紀』の当該人物の記載と一致し、表1と接続する。この後、沼沢系林崎流は長政の弟子・芦澤忠道や新美貞重、子の沼沢忠通らが継承した。

第二節 芦澤家と芦澤忠道

続いて、沼沢長政から林崎流を伝授された芦澤弥兵衛忠道（？―一六六〇？）と、子孫や門人の相伝の経過を整理する。芦澤忠道には、居合伝書にみえる「弥兵衛忠道」の名では、諸藩の分限帳等の公的史料に現れず、関連性が高いと考えられる人名も一致しないという問題がある。

そのため、芦澤家が臣従、定着した会津藩松平家の史料のほかに、他藩の史料も比較して人物比定を試みる。まず会津藩士の系譜集『諸士系譜』の「芦澤三平系譜」¹⁸（図2）をみると、初代の芦澤治郎右衛門某は、万治三（一六六〇）年三月に死没し大窪山を墓所とする。一方、『会津日新館志』が載せる林崎流相伝者の「蘆澤弥兵衛忠通」は、同じく万治三年三月に死去し、後に孫の直矩が神道式で大窪山へ改葬したと記す。したがって会津藩では、両者を同一人物と

毛利（北）就勝 姓大江・本国安芸
└…芦澤伊賀守〔水戸藩家老芦澤信重の父・君次カ〕
└芦澤左近
└芦澤治郎左衛門某 寛永12年3月病死、墓所最上
└芦澤治郎右衛門某 「年月不詳 松平讃岐守様御家来芦澤
助兵衛弟躰養子仕度旨被依頼候事」
└治郎右衛門直治 初・喜兵衛 元和元（1615）年誕生
実・芦澤助兵衛某
└女（養子・治郎右衛門直治妻）
└藤十郎某 承応元（1652）年7月切腹
└弥兵衛某 寛文4年4月病死
└治兵衛某 荒木又之丞某養子

図2 「芦澤三平系譜」抜粋

みなしている。

「芦澤三平系譜」は家祖を伊賀守某とする。伊賀守某は毛利元就の弟・北就勝の子で、信州伊奈郡芦澤の郷に移り芦澤を苗字とした。子の芦澤左近某は「信州七騎衆」として甲斐武田家に仕え、同家滅亡の際に領地を退去した。

武田旧臣とされる芦澤氏は、他の家臣団にも存在す

る。例えば、武田支族の穴山家の家臣から水戸藩家老となった芦澤（蘆沢）伊賀守信重は、彼の親族を後年書き留めており（図3）¹⁹、そのうち芦澤久右衛門は、松平頼重の家臣として封地の常陸下館藩、讃岐高松藩へと異動した。

他方、讃岐高松藩の分限帳では、芦澤水之助家が大江氏の末裔であり穴山氏旧臣であるという²⁰。各藩の芦澤家の沿革は、大江姓かつ武田旧臣であることが概ね共通する。ただし、図3の「左近」や

〔君次父・不明〕

- ① 卜芦沢伊賀守君次（もとの伊賀）
 - ├ 卜姉（72-73歳、水戸在住カ）
 - ├ 卜伊賀守信重（覚書筆者、た、今伊賀）
 - ├ （若林角兵衛）忠道
 - ├ 卜若林助作忠吉
 - ├ 卜若林理兵へ忠知
 - ├ 卜弥兵へ（水戸在住、76-77歳）
 - ├ 卜惣領・市兵へ
 - ├ 卜二男・内膳
 - ├ 卜三男・久右衛門
 - ├ （2、3年下館居住、寛永19年5月讃岐へ）
 - ├ 卜若尾源三郎
 - ├ 卜新蔵（昔「甲州之内さいじゃう」居住）
 - ├ 卜藤蔵（弥二右衛門、弥兵へ甥）
- ②（芦沢）左近（昔「さいじゃう」居住）
- ③善大夫・与兵へ（水戸の家中、親類衆）

図3 「芦澤信重覚書案」

「芦澤弥兵へ」は、寛永一九年当時の彼らの年齢を考慮すれば図2と齟齬するため、会津の芦澤家と接続しない。

保科正之が山形に就封した際、芦澤治郎右衛門は旧鳥居家臣として一五〇石で登用され代官を務めた²¹。鳥居家中で芦澤弥兵衛忠道と目される者は、表1から二人挙げられる。一人は芦澤弥次右衛門二〇〇石で、後の「保科氏分限帳」にない。もう一人は芦澤次郎右衛門一五〇石で、この両者は図2から兄弟と考えられる。芦澤左近には男子が二人おり、長男は治郎左衛門某で、寛永一二年三月に死没し墓所は最上にあるという。次男は芦澤治郎右衛門某で、本系譜の初代である。彼は保科氏仕官後に知行二〇〇石となり、「保科氏分限帳」にも登載された。表1と図2から、芦澤弥次右衛門は長男・

次郎左衛門某、芦澤次郎右衛門は次男・治郎右衛門某に比定できる。次男・芦澤次（治）郎右衛門の名は、「保科氏分限帳」において「芦沢治郎右衛門」、「家世実紀」では「蘆沢次（二）郎右衛門」に比定される²²。一方で林崎流の伝書では、讃岐高松系のみ「次（治）右衛門忠通」と記すが、ほぼ「弥兵衛忠道（忠通）」と記す。もし次郎右衛門と弥兵衛が親兄弟なら、同時期に同じ名乗を避け、同姓同名の他人ならば、林崎流の宗匠として並立すると紛らわしく、区別するであろう。ゆえに両名は同一人であり、「弥兵衛」は若い頃の名乗で、後に「芦澤治郎右衛門忠通」と称したものと考えたい。なお、次郎右衛門某の子「弥兵衛某」が弥兵衛忠道ならば、表1や「保科氏分限帳」、「会津日新館志」の記述と矛盾するため、同一人とはいえない。

なお、芦澤弥兵衛は、須藤茂道と吉成助勝という二人の秋田藩士へも林崎流を教授し、以降秋田藩内において勢力を拡大した。秋田藩における相伝者の伝系は、本城たる久保田城下に止まらず、仙北地域の各所預の藩士たちへも広がっていることが注目される²³。

秋田における林崎流は仙台藩内へも流入し、後述するように技術体系も変容をみせた。芦澤が秋田藩士と接触した経緯や、秋田藩から仙台藩領へ伝播した経過は未詳であるものの、両地域の関連性は、伝書に記載された伝系と術技の目録および構成によって推定される。

この忠通を起点に、沼沢系林崎流は会津藩外へ拡散していった。勢力を拡大させたという点で、忠通は重要な役割を果たした人物であると評価できる。

第三節 讃岐高松藩における新当流の相伝

前節を踏まえ、讃岐高松藩土着の経過と林崎流の展開を論じる。讃岐国直島の三宅家文書には、讃岐高松藩士の黒田氏らが作成、筆写した新当流居合史料が伝世している。新当流を称しながらもその実は沼沢系林崎流であり、当地へ伝播した興味深い経緯を伝えている。

三宅家文書中の『新當流居合（傳）書』²⁴によれば、仙台藩支藩の一関藩継嗣・伊達宗興（一六四九—一七〇二）が、寛文六（一六六六）年秋に同書の作成を命じたという。宗興の家臣の大木定頼は、会津の神田勝重から新当流を学び、宗興自身も「愛其術」した。宗興は伝書の理解が不十分で、それを大木が憂慮していた。宗興には幕府での勤務があり、新当流を習熟できずにいたが、寛文六年秋に至り官暇を得て「東奥之采地」たる領地の一関に下向できたため、書生の遠藤直常にこの書を執筆させた。そして本書を大木から讃岐高松藩士の荻澤忠通へ内容を確認させるために与えた、としている。

本書に基づいて新当流の相伝関係を整理すると、神田勝重から大木定頼および伊達宗興へと相伝され、その学習進捗は荻澤忠通により把握されていたといえる。

ただし、『会津日新館志』は忠通の没年を万治三年とする一方、伊達宗興は忠通が没したはずの寛文七年に『新當流居合書』を送っており、双方の記述に疑義が生じる。さらに伊達騒動の結果、寛文一一（一六七二）年に伊達宗興と父・宗勝は流罪となったが、流刑時の家臣の一覧に大木定頼や遠藤直常はおらず、伊達家側からは両者の存在と新当流習得の事実とを確認できない²⁵。

なお、前掲した三宅家文書の史料一「居合内證之巻」は、沼沢系林崎流の伝書のなかで最も古いのが、不自然に宛名が切り取られており、印可が発給後取り消されたことを窺わせる。三宅家文書の居合相伝にかかる記載は、このような矛盾や不可解な点に留意する必要がある。

上記の『新當流居合（傳）書』によれば、林崎流の継承者を、長野無楽斎権露・井伊家（彦根藩）の従者、沼沢長政・保科正之（会津藩）の従者、荻澤忠通・松平頼重（讃岐高松藩）の従者、神田勝重・保科正之の従者、と列挙する。この記述が真ならば、寛文期には相伝者の間で、長野無楽斎が井伊家の家臣であるという共通認識があつたといえる。伊達宗興とその配下は、先師の主従関係の把握に努めており、本書を受領した荻澤忠通も承知していたはずである。また、流名もこの相伝関係の傍証となりえよう。神田良近の祖父・勝重は元来、神道流小太刀剣術を学び、神田家は林崎流と神道流とを同根の流儀として併伝した。そのため、荻澤忠通も勝重の論理に同意し、流名を「新当流（シントウリュウ）」としたのではなからうか。

『新當流居合書』における居合の系譜は、林崎甚助重信―永野無楽斎権露―沼沢甚五左衛門長政―荻澤治（次）―右衛門忠通―吉田藤右衛門長孝―荻澤止水典頭―荻澤清六三頭―荻澤寛兵衛三美―黒田権右衛門政喜―黒田棟右衛門（政正）、となつている。

讃岐松平家中の荻澤治右衛門は、大老・肥田和泉の配下であつた²⁶。肥田は後北条氏旧臣で、後に水戸藩の徳川頼房に仕え、さらに松平頼重の下館立藩に伴い家老として派遣された²⁷。治右衛門は、

表2 讃岐高松藩・芦澤治右衛門家歴代表

世代	(本家) 芦沢治右衛門家	年代	(治右衛門五男) 芦沢弥兵衛家	年代
1	治右衛門	承応	—	—
2	惣右衛門	延宝	弥兵衛〔止水典頭カ〕	元禄
3	平助(猪之八)	享保	清六(三頭、弥兵衛)	宝永
4	平助	天明	覚兵衛(弥兵衛)	安永
5	惣右衛門	文化	註：『高松藩藩士録一藩士から牢人まで』9、10頁。『讃岐高松藩藩士由緒録』11-13頁。	
6	平助(太作、平右衛門)	文政		
7	惣右衛門 惣四郎	安政		
8	米太郎	明治		

衛門ならば、会津藩の芦澤忠通とともに沼沢長政から印可を受けたはずだが、その旨の記録はなく、同一人物と認め難い。

そこで、讃岐高松藩の芦澤治右衛門と会津藩の芦澤次郎右衛門は同一人で、会津から讃岐高松へ異動したと考えられないだろうか。

同じ肥田与力の吉田藤右衛門に新当流を伝授した。芦澤治右衛門家には分家があり(表2)、清六、覚兵衛の二代が居合の系譜と一致する。止水典頭は、清六の前代・弥兵衛であろう。

『新當流居合書』は芦澤忠通を讃岐高松藩士とし、会津の芦澤家には触れない。一方で会津藩の「芦澤

三平系譜」は、芦澤治郎右衛門(弥兵衛忠道)が讃岐高松藩の芦澤助兵衛の弟・喜兵衛直治を婿養子にしたという。ここに両藩の芦澤家に縁戚関係が認められる。ただし、讃岐高松側の分限帳等で助兵衛を確認できない。仮に助兵衛が治右

その手掛かりとして、承応元(一六五二)年に会津城下で起きた安武太郎右衛門の殺害事件がある²⁸。本事件の背景には家中の若年層の衆道関係があり、藩当局は秩序を乱す事態とみて憂慮した。そこで安武と親交があった容疑者一〇名を切腹させ、多くの若年の侍を追放した。

この時、林崎流関係者も嫌疑を受け、芦沢次郎右衛門の次男・藤十郎が切腹、次郎右衛門は閉門のち赦免、畑権十郎は証拠不十分で赦免された。推測の域を出ないが、本件を因に芦澤忠通が会津を去り、讃岐松平家へ異動したのかもしれない。いずれにせよ、会津藩と讃岐高松藩の芦澤家間の縁戚関係が軸となり、新当流が讃岐高松藩にも伝播したと考えられる。

幕末期には、芦澤覚兵衛の弟子・黒田政正と子の郡平が活躍した²⁹。おそらく芦澤弥兵衛家の流儀継承が途絶えたため、黒田政正が芦澤家から伝書群を譲り受け、さらに三宅家へ譲渡したと料される。

第二章 沼沢系林崎流の術義と思想

第一節 技の体系

本章では沼沢系林崎流を理解するために、その技術の体系と思想の構造とを論じる。はじめに、各地域の伝書を比較することで身体的技術の体系と構成要素を把握する。次に、伝書中のテキストに込められた文意を分析することで、その基本的な解釈を提示し、他系統の伝書との同異点を明らかにする。また、伝書中において万字(卍)に代表される、流儀の思想的構造の核心を抽出する。これらの作業

表3 沼沢系林崎流における伝書の諸項目

番号	項目名称	概要	伝播した地域
1	初重抜	居合、無明剣など5～7本の型	共通
2	二重切（内証）	居合、5～7本の型	共通（二本松除く）
3	三重切	居合、5～7本の型	
4	五箇秘伝	主に立合、5本の型	
5	一流秘術	8～9本の型	秋田・讃岐高松・会津
6	一流秘伝	無意一刀、心の目付、先帰位	共通（二本松除く）
7	極意剣	極意および万事抜	
8	居合内証之巻	8ないし9本の型、別称「投木之身曲」	秋田・讃岐高松
9	拾一ヶ條之次第（十五箇條）	11または15の注意事項、仙台系の拾二種剣に相当	秋田・讃岐高松・仙台
10	霞之巻（懸口）	5本の型	会津
11	立合	立合の型	会津・二本松
12	三ッ表	3本の型、仙台系では三箇秘伝	会津・仙台
13	初重／二重／三重	3項目各6本、計18本の型で編成	仙台
14	表組終	六種剣は6本、七箇秘伝は7本の型、拾二種剣は12本の注意事項	
15	脇指道理	6本の型、脇差を用いた技法カ	二本松
16	向身	14本の型	
17	左身	9本の型、左の敵への対応カ	
18	合剣	5本の型	
19	外物	16本の注意事項カ	
20	右身	5本の型、右の敵への対応カ	
21	小太刀	10本の型、小太刀を用いた技法カ	
22	柔術	腰廻、立合柔術、押形外 各8本	

註：本稿において引用した諸史料から、概ね共通する項目の名称や型の本数を表化した。

本表の型の整理については居合文化研究会・森林健一氏のご教示を得た。

を経て、会津藩内で試みられた沼沢系林崎流の朱子学的再解釈の意義を論じる。まず技の体系を把握しておきたい。伝書に記載された技法の諸項目を表3にまとめると。

沼沢系林崎流では、最初に「無明剣」を全てに通ずる根本の技に位置付け³⁰、座居による居合を順に「初重抜」「二重切」「三重切」としてまとめ、さらに立合の技を中心とした「五箇秘伝」が続く。表3の1～4、6、7が各地の伝書に共通する基本的構成であり、沼沢系の成立当初から存在したと考えられる。この初重、二重、三重という順序には、技の難易度が段階的に上昇するという特徴がある³¹。これは一宮系や白井系が、正面（表）、左、右の順に、敵と対する方向ごとに型を編成したのとは対照的である。また、一宮系や白井系にみられる居合・立合の型等を描いた二人一組の図絵が³²、沼沢系にはない。

秋田藩士の石井忠利は、刃長三尺三寸の刀を使う意義を「長く重きを鍛錬して、短く軽きを以て手の内益自由にせんがた

め也」とし、「その用いる処の刀は、元來人尺より生ず、例せば五尺の人二尺五寸の定なり」といい、平素は身長に合う刃長二尺五寸程の打刀を奨め³³、会津系でも同様であった³⁴。利便性を考慮するとともに、一七世紀後半以降の刀の長さ規制に応じたものである。

その他の項目も、伝播した時期と地域ごとに一定程度類型化できる。まず秋田系と讃岐高松系には、表3の5から9までの項目があり、一流秘術や極意剣の項に「先帰位（千金位）」「万事拔」を含む。非沼沢系にも同じ記載があるため³⁵、長野無楽斎の代から存在したと考えられる。次に、江戸後期に秋田藩から伝播したとみられる仙台藩系の伝書は、表3の1から3を前半部の巻一とし、4、6、13、14を後半部の巻二として分割する。仙台系と讃岐高松系の1から5を比較すると、各項目の中に含まれる個々の型に異動がある。例えば仙台系の「内証之巻（二重切）」には、讃岐高松系の「三重切」中の「殺人刀」「活人剣」が異動し、逆に仙台系の「三重」には、讃岐高松系の「二重切」中の「雄月（雄決）」「金剛剣」が編入されている。また、仙台系の表3の12は、讃岐高松系の「二重切」中の「水月」「五箇秘伝」中の「声之拔」「一流之秘術」中の「無一剣」を抽出してまとめている。

他に表3の13、14は、後述する「手次巻」の語句「十八種剣」「六種剣」「十二種剣」に対応して、技や型を編成したとみられる。特に「六種剣」は仙台藩の相伝者・北山栄壽が加えたと明記する。

続いて会津系と二本松系³⁶の伝書には、立合の項目がある。二本松系ではその一部に五箇秘伝の型の名を含むが、伝書ごとに型の名も本数も異なり、共通性を見出し難い。二本松藩丹羽家中の伝書は、

初重にあたる「神儀」以外は15から21まで独自の項目が目立つ。小太刀や柔術の型が追加され、居合の枠組を超えた複合的な武術教授を企図し再構成されたと思われる。

その他に、技の動きや心得を歌で表現した歌巻が存在し、三一首で構成されていた。讃岐高松系、会津系、仙台系のいずれも基本的に同じ内容、順番で歌われており³⁷、沼沢系林崎流の成立当初からあまり変化がみられない。

第二節 手次巻のテキスト構造

次に、流派の来歴を示す「手次巻」(または「居合相伝序」と呼ばれるテキスト)について、讃岐高松系、秋田系、会津系の三つの注釈書を元に、その文意や構造を把握する。さらに、非沼沢系の当該史料との同異点を明らかにしたい。

沼沢系の「手次巻」には二つの類型があり、一つは各相伝地域に共通する文面で、仮にA型と呼ぶ。対して、秋田系の一部の伝書はA型の章句が加除されており、仮にB型と呼び区別する³⁸。まずA型を掲出する。

【史料一・A型】「居合内証之巻」³⁹

明暦三（一六五七）年、菅澤次右衛門尉忠通発給
△居合相伝序

夫兵法之術、上古中古雖有数多、末世相应之太刀、手近之勝負一命之者無極、此居合而今斯一流、於世致仰信尋、其始奥州之住人林崎甚助重信ト云者、依劍術望林之明神エ百ヶ日參籠、所致無二

精析、満ル曉夢中一翁来テ告曰、汝感甚深之志、將授此妙術宜護持ト云ニ、重信成テ喜悅思、則引我閑室於斯從弱、居合之奧藏以來不依真劍偽劍、得寄得之玄理、不暇磨指、人畏之ヲ、如獅子一死百獸惱裂貴之似リ、鳳凰来儀聖者出現ト云リ、中ニモ居合秘術ト云者、坐牙腰刀以三尺三寸、勝事九寸五分ニ、表六寸ニ勝之妙不思儀也、極位一國一人之相伝也^①、腰刀三尺三寸者過現未三心三身即三寶也、王法是為三劍禪門有十八種ノ劍六種劍十二種劍、亦是濟家室中重伐衲僧截斷修行也^②、殺人刀活人劍、都テ在掌握中、脇指九寸五分者九品蓮葉劍、出離憂苦、海中死之魔軍追倒、釈道九曜五古之内証也、是則曹洞五位秘訣、敵味方ト成事は亦前生之業感也、生死一鉢而百戰場中便大穿光土也、如此觀事、事摩利支尊天之護身符也^③、此居合以賜千金不貴、但於実預之人可傳附之^④、願磨心外之鈍刀ヲ、可授持ス胸中之利劍ヲ者也^⑤。

默然良久云

○珊瑚枝々撐着月（以下略）

かたやB型では、「極意一國一人相伝也：衲僧截斷修行也」と「都テ在掌握中：」以降の文言がない（史料一、波線および二重下線部）。欠落箇所の意味は、①極意の一國一人への相伝、②腰刀三尺三寸と脇指九寸五分の意味と関係性、③錢貨に依らず篤実な修行者に相伝すること、④心の外では刀と居合の技を磨き心の内では武士としての義理・矜持を保持せよという教戒、の四点である⁴⁰。

その上で、「默然良久云」の前に「着々眼流星機掣電、百戦利有伸一掌、一心動靜有機前、万法一鑿一氣迅速而已、唯願向利時當所湛

然」が挿入され、文頭は『碧巖録』第二四則、文末は『証道歌』第一四文段の語句を引用する。

他の一宮系や白井系と比較すると、沼沢系には史料一の下線部および二重下線部の文言があることに特徴がある。意識すれば、林明神の夢告を受けて重信は喜び、参籠する部屋へ戻り参究し、居合の玄理を感得した。その妙技は指折り数える間もなく早く、人を恐れさせ、獅子の一吠が百獸の脳を裂き、鳳凰が飛来して聖者が出現したようだ。『証道歌』や『書経』の一節を引いて例える。この文意は、居合の術技が武威を生じ、敵を戦慄させると理解される⁴¹。「百獸腦裂」に対しては、三尺三寸の刀で敵を制する様を「坐牙腰刀」と形容し、獅子が獸を啜える姿に準える⁴²。

この章句を基準に長野無楽斎の諸系統を比較すると、説話の基本構成は同じでありながらも、一宮系と白井系は近縁であるのに対し沼沢系は遠縁といえる。

さらにA型の讃岐高松系の伝書⁴³をもとに、後段の主要な語句の語義を把握しておこう。「過現未」は過去、現在、未来をさし、「過は刀鞘に納め、現在は刀の抜きたる事、未来は右抜きたる刀にて勝負する事を云」い、抜刀前から次々に予測して動くことの大事を説く。過去現在未来の含意を「三心」、その重要性を「三寶」と表し、そのことが刃長三尺三寸であることと対応する。

「六種劍」「十二種劍」「十八種劍」は、禪宗の座禪にあたり、「物に早速出合事」「利を考へ、物に忽ち応ずる事」をさす。「出離憂苦、海中」は、欲界・色界・無色界の三界において生じる欲望を離れることをいい、居合を修行して悪事を行わず、心明らかであれば敵に遅

れることはないという。なお、手次の巻文末の「珊瑚枝撐着月」とは、海中の珊瑚が月光を受けて速やかに輝く様に例えて、敵の拳動に応じて変化して勝つ居合の要諦を表す⁴⁴。

以上が、沼沢系林崎流の手次巻における基礎的な解釈であり、一部に異動、加除があるものの、上記で例示した以外の語句については、既知の一宮系や白井系の伝書と共通の理解を示す。このように手次巻の記述の相違を整理していくと、長野無楽齋に各門弟が入門し、相伝され分化していった時期を推測する手がかりになると思われる。

第三節 思想的構造―万字・陰陽・転変―

より枢要な、流儀において修行者の思考や行動を規定する原理と、思想的な構造について検討しよう。秋田藩士石井忠許の教説を弟子「永尊」がまとめた『林崎流居合秘伝聞書』⁴⁵は、型の根幹的な構造と稽古観とを表す象徴として、万字（卍）を用いる。万字は四つの直角と八方向の線「四曲八勢」で表され、卍の字は回転して「鍛錬より神変生、神変より奇妙」が生じ、鍛錬の永続的なサイクルによって自己の技を極めるといふ觀念が示される。

万字の構成と、居合の技や型との関連性を説明するのが「十字大事」である。十字とは、刀と刀で十字に切り合った形、すなわち勝負の始まりを示す。これに対し戦闘前の、帯刀する姿を「陰の十字」といい、十字・万字と居合の動きとを、陰陽の性質と働きで表す。陽は豎の方向、我自身の攻撃と、敵を待ち受ける態勢を示す。陰は、横の方向、防御、そして敵に対し仕掛ける姿勢を示す。

十字と万字の字形はどこから見ても同じで、分解すれば「丁丁」となる。十字および万字は回転することで円相となり、刀の軌跡や居合の一連の動きを現す。石井は「転変」という語を多用し、敵の行動や状況に応じて自己が変化することを勝利の核心的要件としている。十字・万字はこの「転変」を象徴する図形である⁴⁶。

翻って秋田系の「一流（之）秘伝」⁴⁷の項では、「無意之一刀」が無念無想で抜刀する戦闘の開始を意味し、続いて「心（之目付）」が敵の心理を観察することを示し、最後に「先帰位」が斬撃後すぐに次の対戦に備えるという、終結と再開を表す。この三項目は円相の図で括られ関連付けられており、先の十字・万字と対応する。さらに護身法の項目があり、修験道で用いられる九字や手印の図を載せる⁴⁸。これらが持つ九字・十字の字義をもとに、居合の十字・万字と関係付け修行者を守護するのである。

基層には、陰陽を基礎とした十字・卍の説明があり、転変して勝つ、という居合の要諦を理論化している。そこに密教の護身法が付加され、宗教的な威力によって居合の術技が強化、増幅される。万字と陰陽を基礎に置く流儀の理論は、会津藩の相伝者たちにより彫琢されていく。

第四節 神田良近の朱子学的再解釈

沼沢系林崎流のテキストをめぐり、会津藩では神田勝重の孫、良近が登場して解釈の刷新が試みられた。

彼は著書『居合傳書口訣準規鈔』の「手次巻」の項において、「凡此巻從古代々秘ス、是居合ノ起源ヲ記ヲ以テ也、雖然、古ハ人

固質而無学、多ハ文ハ釈氏ノ手ヲ假ル、是ヲ以其文固陋、且無益多シ、故ニ其ノ要而已ヲ鈔シテ其他ハ鈔セス」とし、「世間タ、古伝ノ書ト云ハ、一向ニ信シテ不レ分ニ是非一ヲ、是却テ道ヲ愚ニスル也、夫、大聖垂聖ヨリ以下唐ノ賢者大儒ト雖モ過無キニシモ非ス、況ヤ桑門或ハ小藝一事ニ達スル人ヲヤ、是過チ多カラシ、故ニ道ヲ以テ伝へ、過ハ過ヲ以テ傳是故也」と述べる⁴⁹。

良近は、万象の根本的な理解の前提に朱子学を据え、仏教や居合などの武芸は事象の一端であるとみなした。たとえ流祖や先師であろうと、流儀を仏教、特に禅学的に理解することは誤りであり、後に続く相伝者は、朱子学が説く理気論や敬、未発・已発等の概念に基づいて術義の原理を糺し、技芸を実践するべきだと考えていた。

こうして良近は、従来の仏教的な解説を峻別し、読み替えを進めた⁵⁰。無明剣から派生する様々な技の動きは、太極から陰陽が生じた様々な事象に転化することに準えた。初重、二重切、三重切などの型においては、身体の移動、刀の動き、敵の動静を読む心の在り方を、陰陽とその強弱で分類し説明づけている⁵¹。帯刀状態から抜刀し勝負を決するという過程は、讃岐高松系の手次巻では仏説の「過去現在未来」で表したが、良近は朱子学において用いられる「未発」と「已発」で表現している。

さらに根幹的な事項をも解釈の変更を躊躇しない。例えば、三寸三寸の刀と九寸五分の脇差の関係が挙げられる。他の白井系では、三寸三寸は三毒と三部であるとされ、密教的な精神集中と重ね合わせて居合を修行することで、自己の煩惱である三毒を三心に転換し、悟りに至るという含意がある。また脇指九寸五分は、九曜星と五鉞

鈴を表し、転じて人間の運命と死への覚悟を表す⁵²。

対して良近は、脇指は敵が抜いて引いて突く動作にそれぞれ一尺三寸を要し、総長三尺九寸になるという。三尺三寸の長刀は六寸短く、その分早く敵に刀が届くゆえに「表六寸」にして勝つ。六寸の差は「萬治の象の八八六十四の大数」に起因するとし、八卦の思想に基づき、抜刀に必要な距離によって合理的に極意の仕組みを解説した⁵³。

良近は、林崎甚助重信は元々神道流の小太刀剣術を修練し、その結果として居合を創始したと説く⁵⁴。良近の門流は、神田家が継承する神道流小太刀と、沼沢系林崎流とを接合させ、朱子学的な教義を両流派の同根の原理として、一体的に稽古することを目指したのである。

また、流派の始原に置く「天真正」の語を「太極大原ニシテ其ノ理」と定義し、その神を「林ノ明神」としている。良近は「林ノ明神」を、特定の場所に由来しない「林崎氏の崇神」、すなわち林崎重信が崇敬する神ととらえた。良近の門流にあつて「神」の語は、「此神ノ字ヤ深重ノ義ナリ、故ニ極意ノ書ノミ之ヲ書ス、是敢テ藝ニセサルノ意ニシテ且極意ノ書ノミ之ヲ書ス：」⁵⁵「的傳ニノミニ許シテ其他ハ許コトナシ」⁵⁶とし、道統の正統性の象徴として用いている。なお、良近の後代の弟子・清水義為は、良近から自身に繋がる伝系に「新流代々」と付記し、相伝内容が良近以前とは異なることを意識していた⁵⁷。

朱子学による武術の再解釈は、他の武術師範も試みていた。会津藩家老の友松氏興（一六二二—一八七）は、主君の保科正之とともに

朱子学や神道に傾倒し、藩の宗教政策にも深く関与した人物として知られているが、武術では一宮流居合を修めた。

一宮流居合は、一宮左大日照信の次男・盛信を祖とする居合の流派で、沼沢系林崎流とも起源を同じくする。『会津日新館志』は、「友松氏興学盛信、聞本旨口訣、及盛信卒、大恐其伝絶傳、廼授其所聞於盛武〔筆者注・伊賀盛武〕曰、自今而後或從学子者、宜授之、然其人無勇無守、縦雖長技勿決授印可是則先師之遺戒也、且曰、後來學者、弗可用佛語、彼專忍辱、我主廉耻、若或信彼語、猶之間勇怯夫、問耻乞食餘在神道傳」と伝える⁵⁸。氏興は後継者に、仏教用語を避け、自身が信奉する朱子学と神道により、居合の術義を説くことを推奨した。延宝八（一六八〇）年には、氏興が弟子の赤羽俊親へ一宮流の許状を撰するにあたり、山崎敬義へ點竄を請うたという⁵⁹。

会津藩の武術界では、林崎流に止まらず、術義をより正確に理解して実践するために、闇斎学を背景とした朱子学的、かつ神道的理解を重んじた再解釈が進められたと考えられる。それまでの禅学や密教の影響を受けた伝統的解釈を脱し、藩の政策と文化的風潮に沿う解釈へと変化することで、沼沢系林崎流の受容が図られたのである。

おわりに

本稿において確認、考察した結果をまとめたい。まず、相伝者の動向を追跡すると、沼沢長政が長野無楽斎から居合を学んだ時期は、彼の年齢や境遇から、奥州仕置以後であると仮説を立てることがで

きる。他地域の例としては、上野国内の松代真田家臣中において、寛永期に無楽斎の直弟子が伝書を発給しており、遡って同国で無楽斎が居合を教授したことが推測されている⁶⁰。これらのことは、長野無楽斎の活動地域が関東であったことを示唆しているよう。

相伝者の系譜と伝播の過程については、本稿で追跡した芦澤家や、一宮系における一宮照信や谷小左衛門など、付人、御分人などと言われる与力派遣の制度に影響されている点が特徴的である。また、一七世紀に起きた長大で反りの浅い刀の流行も、本流派が各地で支持を得た要因であったろう。その拡大は、親藩・譜代大名の家臣団を起点としており、徳川政権の勢力圏伸長と軌を一にしていた。本来なら関東に限定されていた技術文化が、近世において政治権力の拡大により域外へ伝播していった例と捉えることができる。

ただし、各藩の家臣団同士の相伝関係を確認する際には、家系譜の矛盾や、仕官の経緯を示す史料が不足し、推測に止まるところも多く、事実関係の精査が今後の課題となる。

次に、沼沢系林崎流の術技や思想の展開については、「手次の巻」のテキスト構成に着目し比較すると、その使用する語句や表現内容に差がある場合がみられた。方法論としては、林崎流全体に敷衍して手次巻をはじめとした箇所テキスト比較を行うことで、流儀草創期から門流の分派した時期や、形成段階を知る手がかりとなりうることが指摘できる。

技の体系は、無明剣を基礎に初重、二重切、三重切、五箇秘伝等の項を編成し組み立てられていた。一連の型の動きや敵との関係性、心のあり様は、万字や円相のイメージで捉えられ、敵の仕掛けに応

じ変じて勝つという観念が根底にあった。

会津藩では、沼沢系成初期の相伝者が所属した場所でありながら、朱子学の学説を重視し他地域とは異なる発展を遂げたため、沼沢系成立当初の様相を把握しづらくしている。むしろ分岐した秋田系や讃岐高松系の方が、本来の構造を比較的保全したまま継承されてきたと推測され、当初の形態を知るうえで有用な手がかりとなり得る。なお、秋田系から派生した仙台系は、「手次の巻」の語義に準える形で技を追加、整理しており、技術と伝書の内容をより強く関連づける意図が見られた。骨格的な理論と観念を持つ一方で、地域や派生した先で項目の異動、あるいは追加が行われ、時を経ることに相対的に複雑化したのである。

沼沢系林崎流は、十字・万字など流儀の根幹的な部分も含め、流儀の伝統的解釈が墨守されるのみではなく、藩の政治思想や文化的風潮に沿うものへと必要に応じて変化、順応した。

居合が時代の画期をなしたとすれば、技術・思想両面における柔軟性、そして普及の核となる相伝者が政治権力の伸長と共に各地に異動して広めたという事実こそ、その要因があったといえよう。

註

- 1 和田哲也「伝書にみる居合と剣術の関係について」(『武道学研究』一九一、一九八六年、一〇一―一六頁)。
- 2 和田哲也「居合の成立と技法的変遷に関する一考察」(『武道学研究』一四一―一、一九八一年、二七―三五頁)。
- 3 前註一和田論文。ここでいう「未発」「已発」の語は、単に抜刀した

か否かを指すに止まり、それ以上の語義は与えられていないように見受けられる。

- 4 尾脇秀和「刀の明治維新「帯刀」は武士の特権か？」(歴史文化ライブラリー四七二、吉川弘文館、二〇一八年)。
- 5 「志塵通 上」(『大泉叢書』巻百十二、致道博物館、二〇一六年、二一八頁)。
- 6 「Echo:返照」<https://plazarakuten.co.jp/ketsuago/>「2015-9-19 全国古流武術フォーラム2015」【4】研究発表③③「紀州田宮流から窪田派田宮流への変遷と比較」<https://www.youtube.com/watch?v=ijbx2hLEs。5すれも>二〇二二年一月一三日閲覧。
- 7 「最古の絵伝書に見る原初の居合の様相」(武士魂弘前、2019-9-14 発表③) <https://www.youtube.com/watch?v=FeBlTE2mG4&t=5s> (二〇二二年一月一三日閲覧)。
- 8 太田尚充「弘前藩の武芸伝書を読む―林崎新夢想流居合・宝蔵院流十文字鑑―」(水星舎、二〇一〇年)。Steven Tresson“CUTTING SERPENTS: ESOTERIC BUDDHIST DIMENSIONS OF THE CLASSICAL MARTIAL ART OF DRAWING THE SWORD”(Analecta Nipponica: JOURNAL OF POLISH ASSOCIATION FOR JAPANESE STUDIES、二〇一五年)。田中大輔「林崎居合神社参詣諸藩士の祈願」(『山形大学歴史・地理・人類学論集』第一七号、山形大学歴史・地理・人類学研究、二〇一六年)など。
- 9 林崎甚助源重信公資料研究委員会編、村山市発行、一九九一年。
- 10 間島勲「会津藩における無楽流居合術の伝承」(『会津若松市史研究』第四号、二〇〇一年)。野本禎「会津藩の居合術 無楽流」(会津史学会編『歴史春秋』第九〇号、二〇一九年)。
- 11 会津史料大系『会津日新館志』五(吉川弘文館、一九八五年)、四八頁。
- 12 『金山町史』上巻(金山町、一九七四年)、『金山町史』下巻(金山町、

- 一九七六年)。
- 13 『金山町史』下巻、二〇頁、沼沢家文書。
- 14 菊池研介編『会津資料叢書』第六巻(会津資料保存会、一九一九年)所収、「沼澤實通傳」四三―四四頁。「重通傳」四四―四五頁。
- 15 「家世実紀巻之二」「家世実紀巻之三」寛永二〇年三月一三日条(豊田武編『会津藩 家世実紀』第一巻、吉川弘文館、一九七五年、六四・一八頁)。
- 16 「日新館志巻之二十七」(会津日新館志 五、四八頁)。
- 17 『山形市史資料』第五一号、猪苗代町・岡部孝助氏文書。
- 18 「芦澤三平系譜」(会津若松市立会津図書館郷土資料データベース『諸士系譜』、文政六(一八二三)年)。
- 19 『茨城県史料』中世編Ⅱ(茨城県、一九七四年)一三六―一三七頁。久右衛門の讃岐転封の記述から寛永一九(一六四二)年四月九日作成とされる。
- 20 占部日出明『高松藩士録―藩士から牢人まで』(占部日出明校訂・出版、二〇一一年)。井下香泉『讃岐松平藩士由緒録』(高松大学出版会、二〇〇二年)、九頁。
- 21 「家世実紀巻之二」寛永一三(一六三六)年八月二九日条(『会津藩 家世実紀』第一巻、六四頁)。
- 22 田代重雄編『会津藩 家世実紀 人名索引』上巻(歴史春秋出版、一九九五年)一六頁。
- 23 角館においては林、小野田、陶(居合印可巻(前註九、陶正道家文書、九五―九七頁)、横手においては吉成、石井、吉沢(秋田県立公文書館所蔵紙焼本A288.2.590.1『諸士系図 伊ノ上』(石井)、同A288.2.578～580『系図 95 吉成』、同館蔵吉沢家文書、吉沢四八八―二「居合目録」、文政七(一八二四)年。同文書吉沢七〇五「居合印可巻」、明治三七(一九〇四)年)、湯沢においては齋藤、近藤(秋田県立公文書館蔵紙焼本A288.2.254～257『系図 45 金・根田・近藤』うち近藤氏系図)などの諸士が沼沢系の林崎流相伝者として活動していた。
- 24 瀬戸内歴史民俗資料館蔵三宅家文書五四三三「新当流居合書」、三宅一〇〇五六「新當流居合傳書」(以下、同文書史料番号を「三宅+番号」と略す)。
- 25 大槻文彦『伊達騒動実録』下巻坤ノ巻(名著出版、一九七〇年)、「一関市史」第一巻通史(一関市、一九七八年)。
- 26 占部日出明『高松藩士録―藩士から牢人まで』、一〇頁。
- 27 『香川県史』第三巻通史編近世Ⅰ(香川県、一九八九年)。
- 28 「家世実紀巻之十二」承応元年正月九日条、同年五月二日条(『会津藩家世実紀』第一巻、三九三―三九五頁、四〇五―四二三頁)。
- 29 『香川県史』第一五巻資料編芸文(香川県、一九八五年)。「高松市史」(高松市役所、一九三三年)。
- 30 「無」は刀が鞘に納まり形の見えぬ状態、「明」は横一文字に抜き出した様(三宅五四三三「新当流居合書」のうち「初重之抜」)。
- 31 彦根城博物館所蔵琴堂文庫七九一七「許・太刀格・太刀目録・問答之巻・手次巻・指南歌・神道流太刀格・新夢想流・新道流合巻」(以下、同文庫史料番号を「琴堂+番号」と略す、史料名は後註五〇を参照)。
- 正徳二(一七二二)年、神田良近著。元治元・二(一八六四/六五)年、清水義為筆写。「太刀格」中の「二重切」は「右是七刀所以初重抜加修行此後勝之講矣」、「三重切」は「右七刀二重_ニ又加_ニ修行_ヲ所_ニ以_テ専_ラ教_ニ後_ニ勝_ニ也」という。
- 32 致道博物館所蔵酒井家文書No.五六二「田宮流居合術免状」(万治二(一六五九)年)など。
- 33 小田原市立図書館蔵藤田西湖文庫七三二―二八五―〇三六「林崎流居合秘伝聞書」、文化一四(一八一七)年頃作成(以下、同文庫史料番号を「西湖+番号」と略す)。
- 34 琴堂七九一八。正徳二(一七二二)年、神田良近(持敬斎)原著、

元治元（一八六四）・翌二年、清水義為筆写。「神夢想流刀製法」の項で同様の打刀の規格を記載。

35 前註三二「田宮流居合術免状」。「居合外物次第第五」（前註八 太田、二〇一〇年、一二三―一二六頁）。

36 「林崎神流居合」（前註九、九一―九四頁）。福島県歴史資料館所蔵・堀江正樹家文書²⁵。「林崎神流居合刀術目録」（寛政元（一七八九）年六月原本作成、嘉永六（一八五三）年二月書写）。西湖七三―二八五―〇四四「林崎神夢想流居合剣術惣目録」（文政一二（一八二九）年一月原著、慶応三（一八六七）年一月筆写）うち中川文右衛門本徳の作成した後半部分。

37 琴堂七九―七（会津系）、西湖七三―二八五―〇三六（秋田系）。三宅五四三三、三宅一〇五六「新當流居合傳書」（讃岐高松系）。うち次の四首は各地域で共通しない。「居合とは 心を先に 遣ふべし 太刀を取ては 勿論の事」（秋田系・会津系）、水鳥の 波にうかむを 見てもなを 我足踏みの 事なりといふ（讃岐高松系）、下手こそは 上手の上の かさり物 返す返すも みしり辱すな（会津系）、「居合とは よわみ計て 勝ものを つよみて勝は 力也けり」（秋田系・讃岐高松系）。

38 B型は「居合印可巻」（前註九、陶正道家文書、九五―九七頁）と西湖七三―二八五―〇三六の二点。

39 三宅一〇〇五七「居合内證之巻」。讃岐国香川郡直島の三宅家は倉敷代官所支配および高松藩預地時代に庄屋を務めた（『讃岐国香川郡御料直島三宅家文書目録』、瀬戸内海歴史民俗資料館、一九七八年）。

40 ①④は琴堂七九―九の巻之三「手次之巻」による。

41 西湖七三―二八五―〇三六。

42 三宅五四三三など讃岐高松系の注釈にみられる。

43 三宅五四三三。

44 「珊瑚は海底に有る玉なり、此の玉に日出れば、早速光り移りて玉光

る物に忽応する事を云、ひびきのこへに応するが如く、居合もかくの如し、早速抜合しておくれぬを云」（三宅五四三三）、同じ趣旨は西湖七三―二八五―〇三六、琴堂七九―九うち巻之三「手次之巻」にあり。

45 西湖七三―二八五―〇三六。

46 会津系では、横一文字に抜刀する「無明剣」が陰・坤と地の方形を表象し、縦に抜き打つ「無一剣」が陽・乾と天の円形を表す。この縦横の抜刀が十字に組み合わさり、奇変が生じ卍に変わるといふ（琴堂七九―一）。

47 西湖七三―二八五―〇三六。武道文化研究会共有資料二―三「林崎新夢想流居合聞書想伝」、寛保三（一七四三）年二月。秋田藩士・秋山宮内の作か（『月岡文庫』<https://www.tsukiokalibrary.com/>、二〇二二年七月一日閲覧）。

48 三宅一〇〇五六、琴堂七九―一二。

49 琴堂七九―九うち「手次之巻」の項。

50 良近の居合に関する述作は次の七点（小計二五点）を確認できる。

琴堂七九―六「掛声秘密・新夢想流傳書・武功之巻合巻」、琴堂七九―七「許・太刀格・太刀目録・問答之巻・手次巻・指南歌・神道流太刀格・新夢想流・新道流合巻」、琴堂七九―八「居合目録弁解、介措心得、急務之流巻、刀製方、居合要法、神夢想合巻」、琴堂七九―九「印可準規鈔 新夢想流四巻」（巻之一「太刀目録」、巻之二「五箇之巻」、巻之三「手次之巻」、巻之四「夢想流居合指南歌」）、琴堂七九―一〇「霞之巻全」、琴堂七九―一一「印可纏輿玄妙巻 全 神夢想流」、琴堂七九―一二「印可 纏輿之書 神夢想流・神道流合巻」。これらの多くは良近が正徳元（一七一二）年、翌二年に作成し、四代後の清水義為が元治元（一八六四）年、翌二年に書写、補註したものである。

51 琴堂七九―七うち「太刀格」の項、琴堂七九―九うち巻之一「太刀目録」の項。

52 前註八「Tenson」、二〇一五年。

53 琴堂七九―一。

54 「往昔、重信は神道流（補注…為〔筆者注…清水義為〕曰、飯篠家直の門弟なり）小太刀剣術を修練して後工夫数十年にして、漸く含鞘之利ある事を見得して、茲に始て居合先勝の発明す」（琴堂七九―九の巻之三「手次之巻」）。

55 琴堂七九―九うち巻之一「太刀目録」。

56 琴堂七九―一。

57 琴堂七九―一二。

58 会津史料大系『会津日新館志 五』（吉川弘文館、一九八五年）、二七頁。

59 『会津日新館志 五』、二九頁。

60 前註六「紀州田宮流から窪田派田宮流への変遷と比較」。『信濃史料』巻二八（信濃史料刊行会、一九六七年）六五九―六六一頁、寛永二〇年条、海野家文書。

謝 辞

本論文の執筆にあたり、天池洋介氏より史料調査にご助力いただきました。末筆ながら深く感謝申し上げます。

The Formation and Development of Numazawa-style Hayashizaki-ryu Iai

TANAKA, Daisuke

This paper discusses the formation and development of the martial art Hayashizaki-ryu Iai, a school of Iaijutsu that appeared in the early modern dates, with the focus on the lineage devised and inherited by Nagamasa Numazawa.

Previous studies have pointed out that the martial art of Iai changed from sword-drawing outdoors in the Middle Ages to a ruling martial art that responded to emergencies indoors in the early modern period. On the other hand, it has become clear in recent years that long, uncurved swords became popular around the time Iaijutsu was established.

However, when deriving the characteristics of the era from the characteristics and usage of weapons, it is necessary to consider the trends and influences based on the deviations of the region and period, and the discourses of the people who were involved.

Therefore, in this paper, I would like to answer this question by analyzing the lineage beginning with Nagamasa Numazawa, whose research has been particularly in death.

The target areas for research are the Tohoku region and the Sanuki region, and the target period is about 150 years from the 1580s until the style was established in each domain in the early 18th century. As for the research method, after presenting the primary historical materials related to this school, the secondary sources such as the source material from families of the successors and the way traditions of each clan were used to identify the inheritance procedures and relationships among them. Through this work, I tried to understand the broader dynamics of the inheritors and clarify the composition of their techniques and the main points of their thoughts.

As a result, it was found that the genealogy of successors and the process of transmission originated from the vassals of the Daimyo close to Tokugawa Shogun and spread out of the region in line with the expansion of the Tokugawa government's political sphere of influence.

By comparing the differences in terms and expressions with respect to technique and thought, I was able to identify it as a clue to understand the period when the school branched off from the beginning stage to the formation stage.

The series of techniques is organized so that the difficulty increases step by step, with the underlying idea to win by changing according to the opponents' tactics.

While having a skeletal theory and concept, the traditional interpretation of the school was not only strictly adhered to, but also changed and adapted as necessary to suit the political thought and cultural trends of each region.

If Iai was a breakthrough of the era, it is due to the flexibility in terms of both technique and thought, as seen in the Hayashizaki school of the Numazawa lineage, and the fact that successors were transferred and spread to various places along with political power.